私のリアリズム (13)

——自伝風に

松永浩介

戸部署から出てきた時に、もう一つの喜びが待っていた。何時頃から刊行されたのかはっきり覚えていないが、「姉妹」という名で百五十頁位の婦人雑誌が待っていた。それに六頁か七頁程であったと思うが「タイピストの日記」が紹介されていた。松田解子さんの心のこもった感想文と、根岸の略歴を添えたくわしい紹介がのせてあった。東京のタイピスト協会からの注文もその「姉妹」の記事が仲介したのではないかと思っている。私は早速その発行所を訪ねた。代官山の駅のそばにある当時では珍らしい鉄筋コンクリート造りのアパートで、英文学をやっていた村山英太郎さんの住居であった。発行名義人は村山さんの奥さん（名は忘れたが）であり、編集は一切奥さんがやられて御主人は関係しないとのことであった。奥さんの話では根岸がどういう人であったか全然知らなかったのですが、中条百合子さんと窪川稲子さんから「タイピストの日記」が送られてきて、中条さんから、この本はいいものだから私は目下書けない状態だから「姉妹」で取り上げて慾しいと頼まれたので紹介したのですとのことであった。窪川さんもほぼ同じであったのではないかと思う。「姉妹」は空襲で焼いてしまったので今は思い出せないが、松田さんの文章が心のこもったものであったことをおぼえている。「姉妹」は進歩的な婦人雑誌で当時としては唯一のものだったが永く続かなかったようである。私はその話をきいて、その足で目白の中条百合子さんのところへ行った。紹介の労をとってもらったお礼にである。その時、居合わせた若い夫婦の客がいた。たしか能智修弥夫妻だと紹介されたように覚えているが、やっと歩き始めた子供と一所だった。能智修弥の名は「婦人問題の基礎知識」などの本を出していてその名だけは覚えていた。話題は婦人問題や子供の話であった。百合子さんが「子供って可愛いわよ、でも怖いわよ。大人の時間をえんりょなく喰ってしまうから。」この言葉は正確ではないがそういったことを私は今でも忘れないでいる。それから私はTとの交流が始まっているのを意識して「今までは愛する結婚をしてきたが、今度は愛される結婚をしようと思っています」といったら、「それは敗北ね」と即坐に百合子さんにいわれて、自分の思い上りがたしなめられたのを現在もかみしめている。「冬を越す蕾」「昼夜随筆」等の評論集から多くを教えられていた時である。初対面でいきなりこうした手きびしい批判をきかされたショックは大きかった。

その帰り途であったか、日を改めてからの訪問であったか忘れたが私は渡辺順三さんを訪ねている。「短歌評論」に根岸の歌をのせてもらい、遺稿集の広告などものせてもらい、色々と世話になっていたからである。私の短歌も二、三回発表している。その頃渡辺さんは世田谷二ノ一二八〇で「世田谷読書会」という雑誌廻読会をやっていた。住宅地といってもあたりは一面に畑があってのんびりした地域であった。二階家で、階下が渡辺さんの住居で二階は「虱」を書いた手塚英孝夫妻が住んでいた。隣の平家には間宮茂輔夫婦がいた。この二階家は共産党の大森ギャング事件で検挙されていた今泉善一のお父さんが（建具屋）建てたもので九分通り出来たところで善一さんのお母さんがなくなり、つづいてお父さんが亡くなった。そのためにこの家を売ることになったのをナウカ社の大竹さんの知人が買うことになり、その人の事情で頼まれて渡辺さんが借りることになったという話であった。となりの平家に居た渡辺さんはそこに移り、あとに間宮夫妻が引越してきたのである。手塚さんの前に作家の湯浅克衛が妹さんと住んでいたといったような色々ないきさつのある家であった。渡辺さんは雑誌廻読会が思わしくないので、古本屋をやろうかと思っているところであった。下北沢の店舗を借りる約束をしたというので其処へ行って打合せをやっているところへ横浜から歌人の武政杜郎がやってきた。武政君はある寺の墓所の番を兼ねる堂守で、彼自身「堂坊主」といっていた。その墓地の角塔婆が根本だけくさったのが積んであるから、その使える部分を製材にかけて使ったらどうかという話が出た。無神論者ばかりなので話は決まり、私は本牧へ行って角塔婆の戒名の字面を削って製材所へ運んだ。えんぎをかついで製材所からことわられるかとびくびくしていたがそれは杞憂であった。「俺も製材を始めて二十年になるが角塔婆を挽くのはこれが始めてだ」といって心よく引き受けてやってくれた。それを下北沢に運んで泊り込みで造り、ニス塗りは渡辺さんがやって完成。本が足りなくて空いている棚には左翼の文化人、作家に色紙や短冊を書いてもらってそれをかざってごまかした。開店と併せて石川啄木展をやった。その頃、豪徳寺にいた啄木の娘聟の石川正夫さんのところから、啄木の手紙やノート、其他の資料を提出してもらったささやかな催しであった。その中には石川正夫さんが出していた歌誌「呼子と口笛」もあった。古本屋の名は「大地堂」とした。それはその頃評判になっていたパールバックの「大地」からとったように思う。開店祝いにはたくさんの色紙や短冊があつまった。その中で徳永直の「大切なのはおどろく心」と文句は忘れたが戸坂潤のペン書の色紙があった。その時渡辺さんからきいたところでは戸坂潤は筆は非能率なので書くものは全て万年筆で通しているときかされた。壺井繁治さんと始めて出逢ったのはその時であったように思う。啄木の資料を並んで見ていた時に「僕の家を直してくれないかなァ」と壺井さんがいうのをそばできいていた中条百合子さんが「よしなさい。とても直せるような家じゃないんだから」といった。壺井さんは苦笑してそのままになってしまったが、その頃の壺井さんの借家はひどいものらしかった。栄さんの「大根の葉」が発表されたのはその後であったように覚えている。僕の家も増築したいんだがやってくれないかなァと秋田雨雀さんにいわれたのを覚えているが、その時どんな返事をしたかは忘れてしまった。大地堂開店の前後に私は色々な人達に出逢った。その人達から直接・間接に生きることに勇気づけられたと思っている。大地堂が出来つつある時に渋谷で古本屋をやっていた「短歌評論」の同人であった一条徹（藤原春雄）が時々来て何かと世話をやいていた。彼は私が根岸の遺稿集を刊行した直後に浅間町の私宅に夫婦で訪ねて来てくれた。たしかその時であったと思うが、女子大出身の米屋の娘さんだが結婚しないかとすすめてくれた。一条夫妻が叩き大工の私をどう買いかぶったのか知らないが、これにはいささかびっくりした。尋小卒の大工が女子大出の女（ひと）を女房にするなんて、正に月とすっぽん、とてものことに釣り合うものじゃないからといって、その話には謝ったがその厚意はうれし

かった。その一条に頼んでその頃出ていた徳田秋声全集（売れなくてゾッキになっていた）をまとめて原価で買ってもらった。全巻揃ったものではないが、リアリズムとは何かを知ろうと思って買ったのであるがその金が足りなくて私はTに頼んで送ってもらったのである。

日時は覚えていないが「短歌評論」の同人であったと思うが椎崎法蔵（吉野裕）君が上海に勤務することになって、その送別会に順三さんに誘われて出席した。場所は新宿であったように憶えているが、参加している人達には唯物論研究会のメンバーが多かったようである。酒の弱かった私は少し呑んでほろよいの気分になっていて、皆さんのスピーチをきいていたら、どういう調子で順番が狂ったのか、松永もひとことしゃべれということになった。人さまの前でしゃべるなんてことが不得手な私は突然の名指しでめんくらってしまい、仕方なくしゃべるのはごめんこうむって、佐渡おけさを歌うことにしてもらった。佐渡おけさには私はいささか自信をもっていたのである。文句は即席の創作で「支那へ支那へと草木もなびく、支那は居よいか住みよいか」とやった。日本軍が広東・武漢を攻略した頃で国家総動員法が成立して間もない時である。私はおけさに少しわさびをきかせたつもりでやったのである。歌が終る寸前に舞台（があった）にかけ上った本間唯一君が私に向って叫んだ「松永君、君のおけさは正調だ。もう一度やってくれ。俺が踊るから」私はその声に釣り込まれておけさを再唱した。それに合わせて本間君が踊った。拍手かっさいであった。後でわかったのだが本間唯一は佐渡の出身であった。

本棚が安く出来るので（五〇センチ角とベニヤで造った）手塚英孝さんに頼まれて六尺平方のものを造った。その時に著者から手塚さんに贈った菊岡久利の詩集「貧時交」をもらった。その次は間宮茂輔さんの本棚である。間宮さんは「あらがね」が売れて景気がよいらしく手塚さんのとなりから近くのところへ引越していた。そこはトンガリ屋根の応接間があった。六尺平方の同じ本棚であるがそれを二つ造ったかと思う。その為に三日ばかり間宮さんのところに泊めてもらった記憶がある。その時、青森から上京してきた淡谷悠蔵さんに紹介され、二人の文学論をたっぷり聞くことが出来た。その時私は間宮さんに作家として競争相手で誰が一番手ごわいかという意味の奇妙な質問をしたが、一番怖いのは葉山嘉樹だろうなという答えであった。

本棚が出来て、それを応接間に入れるのに間宮さんと二人で苦労しているところへ、近くにおられた作家の廣津和郎さんが見えて手伝ってもらって据えつけることが出来た。廣津さんは出来た本棚が気に入ったらしく、値段をきいて、そんなに安く出来るなら僕にも二ツばかり造ってくれないかといわれた。然し私は目下横浜ドックに潜り込むために運動しているので、それが駄目になればやらせて頂きますが、這入れたら残念ながらおことわりする他ありませんと返事をしたのである。廣津さんは潜るといった意味をわかってくれたらしく、軽くうなずいていたが、それから間もなく家族に不幸があってその話はそのままになってしまった。その時に私は間宮さんにいわれた。「松永君、いっそ東京で大工をやらないかね。廣津のところをやれば宇野浩二のとこでもやる。宇野は画家の友達が多ぜいいるからアトリエの仕事も出て来るだろう。そうすれば君の地盤も出来るよ」と。然し「工場へ」という私の希望は動かさなかった。

東京で学んだものは何であったか？　短い

鶏

近藤計三

立錐の余地もない。
押しくらで身じろぎ
よろけながらの立ちっ放しだ。
ケースの餌箱にこぼれ落ちる合成肥料。
首いっぱいに突んのめらし
横っちょのを小突きながら
素早く餌をかっ浚うのがいる。
プレハブ造りのだだっ広い鶏舎の
何処かから甘いメロディが
低く響いていた。
何千羽と数えきれない鶏の
うごめく身動きがこもって
生臭い暖風だ。
赤玉と白玉は種類が違う
という説明をききながら
アルミ板ナンバーをまいた足下を
転がる玉子がベルト・コンベアーで
流れ運んでいくのに
俺は呆然と眺めていた。
脈絡もなく
アウシュヴィツを想像し
家とか国家とかの言葉だけが
切れぎれ流れては玉子のように
運ばれ凌い消されていった

期間に接することが出来た何人かの人々から得たものは、文学理論ではなく、人それぞれの生き方を知り得た人間学というようなものであった。中国の戦線が拡大するにつれて国内の弾圧は加速度を加えてきた。国家総動員法が四月一日に公布され、何時戦地に狩り出されるかわからない状況になっていた。詩は書けないで短歌を時たまつくっていた。唯物論全書の「現代哲学」（古在由重）を読んで感心したが誰からきいたのだったか忘れたが著者の友人が「それ以上書くとあぶないからよせ」と注告したというような噂をきいたのもこの頃である。

この年の十二月に私はTと結婚した。西区戸部町にいた弟が引越したあとを借りて世帯をもった。それと前後して妻の友人の口添えで横浜ドックに臨時工として入社した。その友人が上役に頼んだらしく十五円渡したのを覚えている。入社試験は高さ五〇センチ位の脚立を造るのであった。五センチ位の角に横桟を通して、それを二ツ、T番でつなぐかんたんなものですぐ出来た。本格的な四方転びの脚立だったらその方式を忘れていたから出来なかったかも知れない。合格と決って翌日から出勤して木工部に廻されたがそこに斉藤ピアノにいた仲間が二人、町で一緒に働いたことのある大工が二人いた。その大工の一人が「ここは若井さんなんかの来るところじゃないよ」といった。日給が安いのと、私の腕じゃもったいないというのがその理由である。臨時工は三カ月間が見習い期間で、その成績を検査した上で本工になれるのである。見習い期間は七時迄残業しても一カ月六十円位しかとれなかった。十五円の家賃を払っていては夫婦二人でも生活は苦しかった。ずっと後になってわかったのだが、妻は婚前からもっていた指輪を質に入れていた。本工になっても残業を九時迄やって九十円とれる程度で、入社しても三年位は楽にならないようであった。しかも大工道具は自分持ちである。入社した当坐は待望の大工場に這入れたよろこびで浮わついていた。朝、工場の門になだれ込んで来る職工の黒山の中の一人であることは楽しい気分であった。本工になれば「組合」に加入出来る。そうなれば「橋頭堡」を確保したようなものである。仕事はそれからだ、というような単純な空想に浸っていたのが、職場の内容がわかってくるにしたがって色あせて来た。入社して半月位たってから現場へ廻された。進水した船に机を取付たり、船室

を区切る羽目をつくるのである。仕事はすぐ馴れて大したことはないのだがその騒音が並たいていでないのである。同じ場所で鉄板を切る、叩く、焼鋲をかしめるニューマチックの音、それらが何組もいてそばで叩くのだから大きな声でなければ話がわからないのである。鉄板の上で仕事をやるのだから、ノミでも鉋でも注意しておかないとすぐ歯が欠ける始末である。進水した船の現場へ木工所から千メートル以上あるところを朝晩道具箱をかついで通うのである。現場で道具を忘れでもしようものならそれは絶対に出てこない。同じ労働者だからなんて甘ったれた信頼感をもっていたら大変なことになるのだ。

入社当座のよろこびと不安をテーマでいくつかの短歌をつくったがあとがつづかない。家に帰って妻に何か話しかけられてもよく聞こえないので問い返す始末である。神経がいらだっていて読書も手がつかない日々がつづいた。そんなところへ妻の姉夫婦から、身延へ隧道工事を取ったからその事務仕事をやってくれないか、という話が出された。あと半月経てば本工になれて九十円はとれると思ったのでそのことをいうと、義兄の吉田が「食事、家賃、電気、風呂代一切を当方持ちで、（子供が何人ふえても）給料は九十円出すがどうか」といってくれた。私達の結婚について強く反対していた妻の母を姉夫婦が説得してくれた恩がある。食住費別で九十円の給料は好遇である。それに妻の母とも一緒にくらせるので好都合だと思った。その頃葉山嘉樹が子供を教育するのに都会を避けて長野の山奥へ土方の帳付けとなって行ったことをしっていたので、それを真似る気持もあった。その時妻は三カ月位であった。私が身延行をきめたのは他にもう一つ理由があった。それは工場の守衛室に月に一・二回、戸部の特高がうろついていたからである。そいつに発見されたら摘み出されるのは必定で、それも身延行を決めさせる一つの理由であった。私は組長と共に木工部長のところへ行き、退社を願い出た。理由は妻が結核になったので故郷の山梨へ行って静養するためである、といった。戦局の拡大で工場は多忙を極めていて、腕のよい職工は大切であったのである。「君は何でも出来るので当社ではやめさせられないのだが、家族が病気では止むを得ない。但し病気がなおり次第復社することを約束してくれ」といって退社を承認してくれた。

前号作品評

「ある旅から」　長谷川七郎

いつまでこういった通俗情事フィクションをかきつづけるのだろうかという気が、根本のところにある。

そこで別の面からいえば、もっとうまくかけないかということがある。たとえば第二連の全体。これをこのまま散文の一部に組みこんだとしても、少しもおかしくなく、それだけ詩的緊張度が弱いということになる。そしてあるいは最初の「どうにもならない情事の果て」なんてぬけぬけとかいているのはかなわない。「リンゴの白い花びら」だとか、「スミレの花束」とか、道具だても陳腐をきわめる。長谷川の最近の作品のなかでも印象がうすい部類だろう。

「車中日録抄」　近藤計三

現代をとらえようとした作品ではあるだろう。ありふれた車内風景をことこまかにえがいたところに作者の批評をよみとるべきかもしれない。

しかし読みおわって、ひとつの力を感じないのは、対象を見ていくその見方に原因がある。つまりここでは老若男女、さまざまの人物が登場してくるのだが、描写がしょせん常識の範囲を出ていないので、全体としてトリビアルなものの集積ということになってしまう。近藤計三の見方がほしい。

「黒い爪をさしあげて」　秋山清

幼年時代の回想からはじめて、作者の生涯をとおして在存してきたあるものについて、自由気ままにかいた詩ということになるだろうが、その自由気ままさのなかに、伸縮性のある表現力を感じることができる。しかしそのあるものの正体は、「待ちくたぶれた」とか、「虫が飛んで来れば地球のものでない証拠に」とか、意味のはっきりしないことばがあって、正確にはとらえられない。偶感の詩ということになろうが、読む者に迫る力は乏しかった。また「このかなしみはいいようがない」というのはつまらない。

「或る朝に」　菅沼瞭子

ガラスの瞳をした女にひとは何を見るのかといって、痴呆症とか無気力だとかをあげ、「そのどれもが当っていないのでは？」という一行には、ちょっとあっけにとられる。詩のなかで議論をしているようなもので、普通はそれでぶちこわしになると思うのだが、ここではそれが全体にとけこんでいて、そのまま流れていくのだから奇妙な詩である。

これまで見た作者の詩のなかではまとまりのあるものだが、題名や題材からくるエピソード的な感じとはちがったものをねらっているらしい作者が、ある地点に達するのはまだ先のことかもしれない。いまあげた一行もむろん再考の余地があるし、「生理と感情」といった観念語も詩を弱くしている。さいごの「朝の出来事」なんていうのも余分なものだろう。

「夏のおわり」　伊藤正斉

詩によって方法をがらりと変えたりする達者な作者だが、この第一連あたりのだらだらしたかきぶりは意識的なものなのだろうか。そう思って二度読んでみたが、作者の意図はつかめなかった。「今年はいやに法師蟬の鳴き声が耳について／どうして今年にかぎってこんなに法師蟬がさかんに鳴くのだろうかと思う」という二行で、なぜ「今年」だとか「法師蟬」だとか、あるいは鳴くということばをくりかえす必要があるのか。詩作に経験ゆたかな伊藤のことだからと思ってもみるが、このあたりくどくて、すこぶる下手なことは変わらない。こんなことに気がつかないはずもないのだが。

前半の平々凡々が突如変化するのは、猿が現われてからだろう。猿がどういうものを意味するのかわからないが、股にぶらさがるというのだからすさまじい。だがこの空想がいっこうはばたかないのは、だれきった前半との関係があるだろう。

「深海魚」　河合俊郎

深海魚の正体は、ビキニでやられた原爆魚ということになるが、「二五年も深海魚の幻影を追ってきた」にしては、「わたし」のなかにある幻影は、どうしてこう貧弱なのだろうといわざるをえない。ここには原爆にかんするちょっとした常識と、それに安易に結びついた深海魚ということばがあるだけで、詩人の目とイメージを見つけることがむずかしい。日本へくれば食っちゃうなんていうのも、しゃれにもなっていないだろう。ろくな幻影の展開もないだけに、「それは現実よりもっと鮮明にリアルに」などということばが、いよいよもって空しくひびくのである。むろん

わたしが望みたいのは、そんな注釈ではなく、そのもの自体で鮮明でリアルなものを、わたしたちと河合の海に見ることである。

「離脱」　押切順三

押切を知っている者として、ここに新しいものを見るわけではないが、押切らしい思考が、選ばれたことばを通じて波うっている。

それを認めたうえでしかしこの詩では、「―もうよそう、向きをかえる」のところが、単純すぎると思った。なぜよしてしまうのかというその中味を、説明的にでなくうちだす必要があるのではないか。毎日、中央を向いて生きてきた人々が、トラックの一隊を見て突然それをやめてしまうというのは、そこでもう一歩ふみこんだ展開がないかぎり、図式的ということになる。そんなにわかりのいい人人では構成されていないわたしたちの現実をふまえて、もっと泥くさく、摸索を重ねた方がおもしろかっただろう。

「散歩する風景」　梅田智江

「しんと静かだ」とか「久しぶりのことだ」とかいったことばが不用意にくりかえされている。リフレインの効果をねらったのだとすれば、まったく成功していないということになる。こういったことも含めて、この詩はあまりにも冗長であり、徹底的に刈りこまなければならないだろう。

作者のいいたいことが無意味だとは思わない。平和で幸福そうな風景が、底知れない深淵をかかえこんでいるといったテーマは魅力的なものである。

乳母車を押すその動きだけに焦点を合わせて、そこからイメージを彫りあげるような方法もあったろう。

「昆虫記」　いちぢ・よしあき

身につまされるような題材がここにはあるが、こう常套的な説明で色どってしまっては詩的な力をもってこない。「妻をメチャクチャに会わせたくなる」といったような表現は、あまりにも安易ではないか。あれこれの経過報告以外のものを、わたしたちは見たいわけだ。

「昆虫記」というシリーズでかいていることから、これは「子負い虫」となっているが、冒頭の子負い虫にかんする解説が、あとの部分とどれだけ深い関係をもっているか。もちろんたんなる比喩として以外の、内的な関係という意味でいってだ。そしてじつは冒頭の部分がなくたって、詩にはほとんど影響をもたないのであり、それはこの題材を無理に子負い虫にあてはめたにすぎないからである。詩的展開の弱さは、そういう形式でカバーしようとしてもできるようなものではなかった。

「三番線で」　寺島珠雄

気ままなひとり旅の好きな作者がきょうは人を待つことになったが、早く来すぎてそわそわしているというだけのことである。かつての自分ときょうの自分の対比によって、あるおもしろさを浮かびあがらせようとしたのだろうが、こういう状況説明と感想だけでは無理というものだろう。自分がほんとうに待っているのか、あるいはひょっとして出かけていくのか、そのあたりの空想的な感覚をとらえようとしたのではないかという意見もあったが、そうだとしても成功していない。また「かぞえれば狭い」というのは、狭い範囲のことにすぎないということだろうが、舌足らずな表現である。

「献上」　高島洋

江戸時代に徳川家に献上する氷を運ぶはなしを前半にもってきて、後半は今日なら放射能を含んだ魚を大臣に献上して、無害かどうか試させようというのだが、これが諷刺になっているだろうか。諷刺は敵にたいしてヤイバをつきつけるものであろうが、その刃先がすっかり丸くなっていては、どんな威力もありはしない。発想がたいへんイージーであることは、ことばのひとつひとつがまた通俗そのものであることにもあらわれている。海は「青々として」おり、魚は「ぴちぴち」というわけである。高島の詩には、あたりはずれがあるようだが、ついでにいえば、この詩の常識性がわからない高島でもあるまいと思うのだが。氷を運んで江戸へ向かって走りつづける男どもの悲しい胸のうちでも、いちどじっくりのぞいてはどうか。

「一本のネムの木」　和田英子

よく見知っているガードレールわきの家が移転してしまったことと、父の死とを重ねあわせながら、人生の断面をとらえた力作である。父の死をそれだけとして描かずに、このように別の事物と、からませていくのは、その選択が適切である場合は効果的だということだろう。ガードレールわきの家は、おそらくほこりをあびて汚れており、中にあるのはガラクタ家具だ。それが引越し――というより立ち退きのような感じで消えていく、うすべに色の花をつけたネムの木も根こそぎにされて。そんなことをのべながら、不意に「強い女系の間に立って」と父の死にたちかえるあたりの手法は冴えている。うまい私小説といったところで、作者がなかなかのストーリー・テラーであることは間違いない。そして問題はこのように閉じられた、いささか古風な世界に詩が限定されていることだろうが、これはわたしたちの現実と別のところではない。索漠として出口のない時代の重さがここにある。

「ひこばえ」　北本哲三

第一連と最後の連にほとんど同じ表現の5行をもってきているが、無理に詩の形にととのえようとした以外の結果は生まれてこない。そして内容はいま政府の進めている米作制限がよくないものであるという解説とごくありふれた描写だけである。ほんとうのところ、作者はこの政策についてどう思っているのだろうかという気がする。それに批判的だということはわかるが、詩から判断すれば、大した怒りをももっているわけでもなさそうで、困ったもんだというあたりのようだ。そういうところでとにかく一篇の詩にまとめようとすれば、つまりはこういった詩になり勝ちなのだろう。むろん批判をもっと強く表面に出してほしいなんてことをいっているのではなく、作者の心にもえたぎるものがあれば、ひこばえを見るその目が違ってくるだろう。

「ハプニング」　中野桂子

市長の発想による月見会のゴタゴタにたいする反感をのべているが、詩的批判とはかなり遠いところにある。市長の発想がきわめて安易であり、教育委員会の手ぎわがわるくて、団子が足りないさわぎになったことはわかるが、そのほかにいったい何があるのか。これがPTAの会報とか新聞の婦人欄にでものっていれば、とりたててものをいう気にもならないが、そういったものと同じレベルでは、詩としては困るのである。通俗良識派としての寸感がここにはあるが、良識派の特徴は、自分については目を注がず、あれこれの事象についてパターン的な発言をくりかえすことである。政府もわるく、役人もわるく、ひどいですわねえというわけだ。しかもこの場合でいえば、もしも教育委員会がもっと多くの予算を組んで団子をたくさん買い、手ぎわよく運営したとすれば（そのくらいのことは可能であろう）、たちまち成り立たなくなってしまう程度の次元にとどまっている。

「ポプラ」　宮田正平

作者の思いは、朝鮮にたいして特殊なものがあるのかもしれない。第二連の、自分をし

めつけるポプラといったところからは、朝鮮で加害者であった経験でもあるのかと思わせる。しかしそうであったとしたら、それがやはり詩のなかに、個々の事実の報告ということでなくとも、もっと強く反映していなければならなかったろう。ありふれた表現「亭亭とそそり立つ」だとか「水ぬるむ小川」とかにつづけて、ごく一般的に現在の自分をうたっても、詩的感動は創造できない。そしてもしも朝鮮での経験がなかったとしたら、ごくありきたりの想像をしているということになる。「南朝鮮に／春は／まだか」とはきまりきった結末。

「他人のそら」　木原実

たたかいの大きさ、複雑さに詩の表現がついていけない一例ということだろう。対象を客観的にとらえるのがわるいわけもないのだが、この詩に出てくる荒壁だとか、板屋根、釣べ井戸などがわたしたちに喚起するものはごく貧しい。わたしたちがきいているあの激しさ、深さがここにはとらえられていないということだ。

「バカヂの来歴」　姜舜

いままでの作者の判じものめいた詩とはかわって、たいへんわかりのいい、質もかなりのものだった。こういう正面きったうたいぶりには最近どこでもお目にかからないが、ここに新しい手法があるわけではないにしても、朗々たるうたいぶりのなかに大きな悲しみが脈うって、読む者に迫ってくる。「トタンはふくべの花に適せず」のあたりは理屈っぽいにかかわらず、それさえ全体のとうとうとした流れのなかにまきこんで、いっこう調子を崩すことがないのだから、これは力量といわざるをえない。バカヂを一本の筋としてつらぬき、民族の暮らしと歴史を適確に見つめながら、うたいきっているが、作者の描写力は第二連のバカヂ生成をめぐる物語によくあらわれているといえるだろう。いくつも目につく古い表現が気にならないわけではないが、こういう詩ではそれを指摘してもあまり意味をもたないかもしれない。

「風のたより」　緒方宗平

この作者の詩では珍しく、ちょっとわからないところがあるが、足場をふみはずして死んだ男とその伴の、そんなあぶなっかしいことをつづけて食っていかざるをえないことへの作者の思いは、ある程度出ている。しかしそこまででとどまったのは、いつもながら詩が小さくまとまってしまって、対象に深くきりこむことがないからである。

もうひとつの詩「五月、若葉」は、これはまたこじんまりした感想だった。公害という現代的な題材でありながら、作者の思考はあまりにも静的である。

「こだわる日」　小宮隆弘

兵隊のときにぶんなぐられた記憶と現在とをからませてかいているが、まずなぐられる部分が通りいっぺんだろう。事実の大ざっぱな報告におわっていて、生動するものがない。記憶はうすれてきているにしても、詩的想像力は大いに働かせてほしいのである。こだわりをもっている作者なのだからあくまでこだわってほしい。

それにしてもあとの連の「いまでははっきりと忘れてしまったが」とはどういうことなのだろう。これほどの衝撃を作者にあたえた男の名も階級も、いまではまったく忘れてしまったということのようだが、これはいかにも不自然である。しかも一方、「直立不動のながい時間」はいまでもたっているというのだから、焦点がぼやけている。前号に問題作を提出した作者だが、今回は意図のはっきりしない詩になった。

（西杉夫）

Tさんの家

梅田智江

Tさんの家は　私の家の前にある。
四年前、Tさんは　ここに二階建の家をたて、結婚し、はいってきた。
塀がなかったので、通りに面した一階の居間は、ガラス戸をあけはなしていると、むきだしになり　不安定な感じがした。
そのガラス戸は、ほとんど毎日、あけはなされていた。
三十に近い奥さんは、それでも新婚の匂いがした。日曜日には夫婦つれだって、駅前で買い物をしているのを、みかけた。半年ばかりたって、まっ白なベビーダンスが、居間におかれるようになった。流産したらしいという噂だった。日曜日には、マルチーズという犬を抱いた奥さんと、Tさんの買い物姿をみた。
一年がたち、Tさんの家の前は、毎日、奥さんたちの話し声が、するようになった。Tさんの奥さんと、Tさんの右隣のNさんの奥さんの話し声が、しはじめると、いつの間にか、四人、五人と奥さんたちが、集まってくるのだった。外出の用があって、玄関をでた私に、一斉に射すくめるような眼付がそそがれ、あいさつされたりした。
私は終日、家にこもっていた。
去年の秋。
Tさんの家に、赤ちゃんが生まれた。元気な女の赤ちゃんだった。寒くなっても、Tさんの奥さんは赤ちゃんを抱き、家の前に立っていた。すると、ひとり、ふたりと奥さんたちが集まってくるのだった。お天気のこととか、子どものこととかの話をしていた。
そして春のある日。
突然、Tさんの奥さんは、お経をあげるようになった。
朝、十時ごろになると、きまって、読経の声が聞こえてきた。異様にかん高い声だった。その鳥のような異様な声は、静かな通りを圧到していた。
赤ちゃんは、くりくりと元気に育っていた。あいかわらず井戸端会議は、にぎやかだった。むきだしの居間の不安定さは消え、新婚の匂いは、もう、なかった。日曜日になると、奥さんは赤ちゃんを乳母車にのせ、犬を抱いたTさんと買い物に、でかけていた。
そして、日曜日だけ、読経の声は、聞こえてこなかった。